

十一月六日 宿南ふれあいクラブにて

④ (担当 左起子 俊彦 正)

吾宗災禍薦臻、産稍不如舊、則吾父母之遺物、或不能悉保之、而二三兄弟、皆早離慈訓、則閨閣之内、或不能無時失和、悲感交集、憂思鬱塞、深夜起坐、不覺涕泗之沾襟也、詩不云乎、

読み

吾宗災禍薦臻し、産は稍舊の如くならず、則ち吾父母之遺物、或は悉く之を保つ能わざる、
而して二、三兄弟は、皆早く慈訓を離れ、則ち閨閣の内となる、或いは時には和を失なう無き能わざる、
悲感交集し、憂思鬱塞し、深夜に起坐す、涕泗の襟を沾すを覚えず也、詩に云わすや、

言葉

宗Ⅱシユウ 本家 一族 災禍Ⅱサイカ 思いがけない災い
薦Ⅱセン しきりに 臻Ⅱシン いたゝる どんどん進む
産Ⅱサン 生活の元になる資財 稍Ⅱシヨウ やや 少ない
舊Ⅱキユウ 旧 もと 悉Ⅱことごとく 全部
慈訓Ⅱジクン 愛情のある深い教訓、母の教訓
閨閣Ⅱケイコウ ねや 女性の部屋
悲感Ⅱひかん 悲しむ 悲しみ痛む
鬱Ⅱウツ こもる 塞Ⅱサク ふさがる
憂思Ⅱユウシ 心配する心 うれい思う
涕泗Ⅱテイシ たれるなみだとはなみず
沾Ⅱウルオス ぬらす
詩Ⅱシ ここでは「詩経」

訳

私の家の災いは進んでいき、財産はほとんど元のようににはならなかった。私の父母の残した財産などは、ほとんどこれを保つことはできなかった。
そして、兄弟達は皆早くから、愛情のある生活から離れ、閨中での生活であった。時には和みを失うこともあった。悲しみや嘆きが入り混じって積もり、憂鬱な思いに胸を塞がってしまうようなこともあった。
(思い出して)深夜に目覚めて座ると、涙で衿をぬらすのも気づかなかった。
詩経に言っているではないか。

